

## 題目 南阿蘇村における石積み構造物の文化的価値に関する史的考察

○九州大学 学生会員 高石裕人 九州大学大学院 正会員 樋口明彦  
九州大学大学院 正会員 田浦扶充子 国立研究開発法人土木研究所 非会員 榎本碧  
九州大学大学院 学生会員 Byambatsogt Arvinzaya 九州大学大学院 学生会員 李舒テイ  
九州大学 学生会員 吉田嵩寛 九州大学 学生会員 吉川悠太  
九州大学 学生会員 稲垣悟 九州大学 学生会員 豊東翼

### 1. 背景と目的

南阿蘇村には37の行政区が存在し、60以上の集落が存在している。このうち外輪山から白川に注ぐ小河川の護岸や、南郷用水沿いの集落には歴史的な石積みが多く残されており、地域の水害や利水の歴史を今に伝えていることが明らかになっている<sup>1)2)</sup>。歴史的な石積み文化は村内のほぼすべての集落でみられるが、ほかの集落でも同様にその地域の歴史を反映した独自の石積み文化が存在することが予想される。自家用車が一般市民に広まるよりも前の時代、石積み用いる石を遠くから持ってくることは難しかったため、集落の近辺で手に入る石を用いて積み上げられていることが予測される。したがって、同じ南阿蘇村の中でも、集落の立地によって使われている石の種類や石積みの築造方法に違いが生じていると考えられる。

本研究では、どのような文化的背景の違いで集落ごとに異なる石積み文化が形成されたのかを、そこに昔から暮らしている住民の方のお話から明らかにし、南阿蘇村の石積み文化に文化的価値を見出すことを目的とする。



図1 阿蘇カルデラの全体図と南阿蘇村内の主な行政区・集落の位置図

### 2. 調査方法

#### 2.1. 村全域を対象とするヒアリング調査

まず、南阿蘇村全域の集落の石積みを対象に現地調査を行い、どこにどんな石積みがあるかという全容を把握した。特に歴史的な石積みとみられるものに関しては、築造年代・築造者・石の採取場所・被災歴・修繕歴という5項目について石積みの所有者の方にヒアリング調査を行った。

#### 2.2. 有識者を対象とした「思い出し語り」

次に、ヒアリングの結果から特にほかの集落と異なる石積み文化がみられた集落をピックアップし、集落で最も古くからその場所にお住まいの方や、石積みの経験がある方を中心に個別にアポイントメントを取り、民俗学的アプローチでお話を伺った。具体的には、事前に決めた質問事項を順に聞いていくのではなく、対象者の方に1時間程度自由に語っていただきながら昔の出来事を芋づる式に思い出してもらい「思い出し語り」を行った。その対象者を表1に示す。

表1 「思い出し語り」の対象者

居住地	肩書	名前 (敬称略)
両併一区 長尾野集落	後藤建築設計事務所創業者	後藤敬喜
第8駐在区 岸野集落	父が元石工	今村和明
川後田区 川後田集落	元南陽建設勤務	今村次春
喜多区 喜多集落	(有) 大塚組代表取締役	大塚桂一
喜多区 喜多集落	(株) 藤本建設工業取締役会長	藤本憲起
川後田区 川後田集落	南阿蘇村元村長	今村輝昭

### 3. 調査結果

#### 3.1. 村全体での傾向

調査の結果、村全体について得られた情報として以下の3点があげられる。

- ・農家が冬の農閑期に副業で石積みをしていた
- ・水害や地震でもほとんどの石積みが崩れなかった
- ・石の加工や石積みを行う専門の職業である石工をやっていた人は外輪山側の集落に多かった

また、6つの集落についてほかの集落とは異なる特徴がみられた(表2)。紙幅の関係上、一例として両併一区長尾野集落について詳しく述べる。

表2 特徴的な文化がみられた地区(両併一区以外)

行政区・集落名	主な特徴
吉田三区 下鶴集落	・白川沿いの低平地で水害の被害大きい ・石屋が多く、隣の集落まで石を積みに行っていた
中松一区 赤池集落	・集落全体にかつての溶岩流の塊が残っている ・溶岩から切り出した石を使っている
川後田区 川後田集落	・土石流で流れてきた石を石積みに利用 ・間知石を作って業者に売るバイトをしていた
喜多区 喜多集落	・石屋が採石場を所有 ・鳥居や石塔に用いる大きな石を切り出していた
第8駐在区 岸野集落	・白川や外輪山から持って来た石を家の敷地で保管し、家族や親戚ぐるみで石を積んだ ・建設会社から日当をもらって村のあちこちに向いて石を積む石工が今もいる

### 3.2. 石の採取場所

長尾野集落における石の採取場所は、主に山、地中、川の3種類に大別される。かつては北部の白川から牛や馬に引かせて石を持ってきていたが、時代が進むにつれて耕運機や1トントラックに運搬手段が変化していった。また、水筋のある場所付近の農地からは耕運機で耕すたびに石が出土し、それを自宅の擁壁に用いたという家もあれば、農地内に置いたままにしている家もあった。集落南部の外輪山の一角をなす城ヶ岳には採石場があり(写真1)、かつては地元の土建屋や石屋がそこから間知石を切り出していた。中には採算が取れず採石場に放置された石もあり(写真2)、地元住民はそれを持って帰って自宅の石垣に用いた。いずれの場合も、石にノミで穴を空けて楔を入れ、玄翁で叩いて割って用いるという点では共通している(写真3)。

### 3.3. 石積み作業の規模と構成要員

かつては手先が器用な農民が音頭を取って集落の人たちで協力して石を積んでいたが、時代が進むにつれて石屋に頼んで積んでもらうか、石屋の作業を手伝って石積みの技術を学んだ農民が家族だけで石を積むという形態に変化した。「思い出し語り」を行った後藤氏自身は、妻と2人のみで自宅の石積みをして10年かけて積み上げたという(写真4)。また、この集落の民家

は土羽と竹やぶで囲まれていたところがほとんどであり、石積みは周囲の道路の拡張に伴って新しく積まれたものである。石積みは何回かに分けて積み上げられたものが多く、積まれた時代が異なる部分の境目がはっきりわかる石積みが多くみられた。



写真1 城ヶ岳の採石場跡



写真2 採石場跡に放置された間知石



写真3 ノミを用いた石割りの実演



写真4 後藤氏宅の石積み

## 4. まとめ

南阿蘇村という狭い地域の中でも、自然災害の多い場所かどうか、岩盤があるかどうかなどの様々な地理的条件によって、石積み作業を行う集団の規模や石屋の有無など、異なる文化が生み出されたことがわかった。また、コンクリートや機械を用いるようになって、石屋の技術や集落での共同作業として石を積む文化が部分的に受け継がれていることも確認できた。したがって、南阿蘇村の石積みは、それぞれの地域の文化を今に伝えるものとして文化的価値があるといえる。

### 謝辞

本研究はJSPS 科研費JPd22H03886の助成を受けたものである。

### 参考文献

- 1) 寺井達哉：『南阿蘇地域における水無川の歴史的な石積み護岸に関する研究』, 2021.
- 2) Byambatsogt Arvinzaya：『南阿蘇地域における歴史的農業用水路の景観資源に関する研究』, 2021.